

但し死者を北向きに寝ることは、いかに入るのやがてにふつと
ことという 伝説つたのや 361P
形相 573P 世にも 2287

西鶴「好色一代男」①-198
夏六月(みなづき)紀下364
5.856P
すな 小林494P
白い高年世に丹波太郎

世にも恐ろしい形相の大男

往古の人々が、近畿地方の地形の上に重ね
合せて思ひ描いた大男は、とてつもなく巨大
だったといえよう。

それではここには、いま一度、その大男の様
子や、当時の人々の考え方などのこまごまし
たことについて、頭部の方から順次みてみた

いかにしよう。(一部重複)

と謝半島から越前岬に至る若狭湾の海岸線
は、北向きに寝た男の首から上あたりの輪郭

を、それとなく示しているようだが、
また既に述べたように、陰暦の夏六月頃、

丹波方面の山の上にもくもくと立ち昇る入道
雲のことも、丹波太郎と称したといひ、井

原西鶴の「好色一代男」巻四に、
「折節の空は水無月の末、山々に丹波太郎

といふ村雲おそろしく、俄に白雨いて、神鳥

小林 239頁下
白雨といふ

277417x
大カマワ 490°
夕雨無し

云 277°
↓ 2312° 5.857°

そくせん
俗語 1300°

⑤5393° 95° 小野小町 1415°
⑤5610°-1/2 ⑤5610°-1/2

臍をこころ懸け、云々
とある。(「広辞苑」へ丹波太郎)。「井原
西鶴集」(1)日本古典文学全集、小学館、一九
八頁参照。第九十五頁「あなめあなめ」の項において既述
いつ頃からか、かでないか、近畿一月に住
む者達は、北の方、丹波の山の上に無気味に
かゝるに立ち昇つてゆく入道雲を見て、
大男が、頭をもたげ、両手を伸ばそうと
している。大川に忍水たのであろう、と想像立
と考へ、また、江戸時代の俗語・俗語を集めた口俚
言集覧(江戸後期の音韻学者・漢学者太田
全斎著といわれる)に、
「陰暦」六月の頃丹波の方の山より出る
雲を丹波太郎と云ふ。此雲出るときは夕雨あ
り。
とある。(「井原西鶴集」(1)日本古典文学全
集、小学館、一九八頁注九参照)
江戸時代には、もはや、本来の意味が、

思い描いた
⑤5856-1/2

⑤5856-1/2
276

⑤5814

5,858

丁=147
10丁=109m
胸突ハ丁=2156

「もくもくと」
⑤5876-1/2

次頁
から

ことはすっかり忘れ去られ
△丹波の山の上にムクムクと立ち昇るおそ
ろーげな入道雲のとき、丹波太郎と呼ぶ
というこのみ辛うじて言い伝えられて
いたのかも知れない。
●なお、死者や幽霊の顔には、通常三角形の
頂点を上にした白布が配される。この
三角形の白い布は、ほぼ三角形状をし
た白い入道雲を暗示しているように思われる
■若狭湾（頭部）の南一帯に広がった起伏の多
い丹波高原あたりは、大男の胸部に相当
する。
△死んだ者は、丹波高原（死出の山）
の麓に至り、胸突ハ丁の「死出の山」を越え
て冥途の旅を続ける。
と考えられたのであろう。
●死んだ大男の亡霊が、次々に丹波高原に死
出の山の北麓に降り立ち、絶え間なく南へ
南へと旅している様子が
想像される。

⑤5856-1/2

想像される。

みかんえ 2139P 未練
げんせえ 712 現世
ごんえ 2014P 魂

5484P
5544P

5,859P

平安前期のある時のこと、南を目指して旅
を続ける多くの死者達の中に、あの深草少将
の亡霊がいた。
しかし、深草少将の亡魂の現世への未練
はあまりにも大きく、
「私は、成仏したくない」
という思いがつのつていた。
丁度その頃、深草少将は、死出の山を越え
たあたり、平安京北郊の市原庄という所を
さまよっていた。
へおや、ここは市原庄という所だぞ。私
が長年住んでいた上総国の市原庄なのだろ
うか。いやいや、このあたりに国府や海は無い
から、違ふ所なのだろ。うーうーかし
まあよいではないか。気に入った。私は、こ
の市原野辺に留まって、私の恋するあの
人、小野小町に亡霊がやってくるのを待つ
ことにしよう。
こうして、深草少将は、長い年月にわたつ
てただひたすら待ち続けた。――なにしろ、小野

5543 同 5485 同 5542 5617 同小町 12P

5484 下 5830 5875 5542 5860

見付く 2122P

小町が、ずい分と長命を保ったからであつた。
とはいへつゝ、深草少将は、小野小町の
亡霊を見付け出した。喜んだ深草少将は、小
野小町の亡霊に取りついてしまひ、
小町を南下させなかつた。
もつとも、小野小町は、早く成仏したかつ
た。もしかしたら来世で、光孝天皇や息子と
再会できるかも知れないからである。
さて、平賀京北郊の八瀬の山里で一夏を送
つてゐる僧のもとへ、小町は里女の姿で毎日
木の奥や薪を持って来る。回向を受けて
成仏したからだつた。
僧が、その女の素性を問うと、女は、
「己が名を小野とは言はじ」といふ。
薄生ひたる市原野辺に住む姥ぞ
と答へ、回向を乞うて消え失せた。
この女を小町の幽霊と察した僧が、市原野
辺に行つて回向をしてゐると、女が再び現れ
授戒を乞うた。するとそこへ一人の男が
現われ、
「りや叶ふまい、戒授け給ははうらみ申す」
といふ。

仏教語でい
さでない ⑤5543 同文 ⑤5485

財の火の読入 185
改行 ⑤5863 左に類似 ⑤5527 ⑤5861

へし。はや歸り給へお僧

・そしてその男は更に、

「二人居るのも悲しいのに、私を唯一人取

残して成仏しようというのか」

と言ひ、女を引き留めた。

・この男女が少将と小町の亡霊であること

知つた僧は、二人共に成仏させようとして、

「懺悔の爲に、下 百夜通ひの有様を示されよ

と言つた。

・この勧めに従つて、少将の亡霊はその時の

事を物語つた。さらに、小町が諭した飲酒の

戒を悟つたことが一念発起の基となつて、兩

人共に成仏したという。↑↑↑↑(第九十五

章へ深草少将の項において既述)

■このように、平安時代に

へ生きてゐる人間が住んでゐる近畿地方の

大地上を、実は何と、目に見えないとはいへ、死

者の亡霊達がひっそりなかに通り過ぎてゆく

と考えられ、~~（以下）~~ていたのかも知れな

きこのうの金殿玉楼がきようは焼け野と化し

町に盗賊、追いはぎが横行した十一、二世

H6.6.25(土)⑤

→

リハロ 老婦 恋道手道 22
あすはく 2182 恋道手道 22
恋道手道 22 5,862

うら 怨み 恨 215°

ろうか。

紀頃には、罪なくして殺されたり、道はたに
倒れて死ぬ者など、数かぎりなくあった。
●そう、た亡霊ばかりではない。
●密かにうらみを寄せ、のろいをかけている
者、生霊もある。
●これらの、目に見えなりのものの恐ろしさか
日夜貴族たちを悩ませた。この当時では、
●地獄の觀念が強まっていた。この当時では、
●このような亡霊や生霊は、鬼と考えられた。
●朱雀門や、羅城門にも、鬼がいるという
うわさであつた。(「日本の歴史」(3)読売新
聞社、一八五十一一八七頁参照)
●八天界か人間界に行きたいと願う穏やかで
自制心の強い亡霊たちは、かりならともかく、
●悪逆無道の限りをつくしてこの世を去り
冥途をさ迷っている亡者達は、地獄へ落ちる
前に何をしでかすか分かったものでない。
●と、恐れられた。
●特に、左比の河原(賽の河原) 南北城
あたりは、亡霊達が日夜毎、絶え間なく通
り過ぎて行くところと考えられたのではなか
らうか。

おんりお
延霊 名342

たたり
出 示 1376

百鬼夜行 財の(史B)読売185P
586 たい数似 5,863P

史読本 聖徳太子の世に77の進141P
延み 215P

延 894
さてこ見 延った通り、やけり

京都盆地から奈良盆地にかけて、多くの寺
々がひしめきあっている。そのなかで、
領ける。そうして、平家時代の史書
今昔物語を始めとする文学作品に、あまほと
数多くの物の怪たちが現われることになった
のであろう。

古墳時代の人々は、死者と生者の間には
きりと一線を引いていたようである。か
平安時代の人々は、怨みをもつて死んだ人間
が、超人的な力を得て、自分を死へ追いやっ
たものに報復する、と考えたのだ。た。た。た。
史読本 昭和五十二年五月号 新人物往来社 一四一頁参照

な。に。ろ。へ。生。き。て。い。る。人。が。住。ん。で。い。る。大。地。を。
目に見えない亡霊等が百鬼夜行して、いる。
というのであれば、恐ろしい。無気味極まり
ない。

第566図参照

人々は、死者の出現に常におびえ、目に見
えない怨霊に苦しめられ、

5,864^{P-1/2} 縦の線を目立たなくして下さい。

この線はマメで結構です。
→HIV

カラー
頁の
上半分に
載せて
下さい。



著作権
許諾は
不要です。

12Q4
ゴ4
12Q4

渦巻く黒雲とともに姿を現したのは、角のある動物の背に乗った、鋭く、大きな左右に突き出した角をもつ異形の者。まるで西洋のサタンのような。絵巻はここで終わっている。

またか
踏

14Q4

第566図

HIV
白水研本

ひびき
『百鬼ノ図』

大きな

ようかいえまき
『妖怪絵巻』
7Q4
13Q4

日本の異界をのぞく 平凡社 2010年7月24日発行 15頁参照
507

5815 5816 5850 5816
 5.864 地蔵菩薩 38 5850 5816
 石の塔

トル

大男の腹部に相当する所はただ、広い口京
 都盆地の腹部を横切る太い皺に相当するの
 は口淀川及びその支流、そして臍に相当す
 るのは口巨椋池と考えられたことだろうが。
 (既述)
 巨椋池のやや北方、賀茂川と桂川が合流す
 るあたりの河原を、昔、左比の河原と呼んで
 いたといい、——賽の河原とは、この左比の
 河原(西院の河原)のことであろうという。
 賽の河原では、幼くして死んだ子供供達が、石を
 積みあげ、塔を作っているという。(第九十六章、冥
 途の旅の項において既述)

●清和天皇の貞観十三年(八七一)閏八月、
 この左比の河原あたりは庶民の葬送の地と定
 められた。

●のちに庶民の葬送の地は七条へ移されたが、
 十五歳以下の小児はやはり左比の河原に葬
 られたと定められていた。

という。(「地蔵菩薩」紀野一義、集英社、
 三八頁参照)

(*)

次
順
から

大男の心も、天候が穏やかなときなどには
晴れば水とすに違いない。
●右手は、出雲国の島根半島や備中国の吉備
子島(近世、見島半島になつた)などの方へ
と、自由に動いてゐる様子が思ひ描かれた
とであつたらうか。
●また左手は、能登半島にあるいは知多半島
や渥美半島の方へと、動いていくように想像
されたのかも知れない。
●なんとも巨大で、恐ろしいが、
しかし、この大男は、時に琵琶の弦を
掻き鳴らし、世の中に妙なる楽の音を響かせ
るのであろう。
●琵琶の形をしてゐる近江国の琵琶湖は、
まさしく近畿地方の大男が持つにふさわしい
大きさであるといえよう。

(*)

ナカ 463
堂 916
職 1798
ナカ 173
肉 173
外 173

エギ 916
エギ 882
西園 33 所 次 刊 礼 45
大ナカ 599
⑤ 5883
5,866

ミナ 3
三途の川 ⑤ 585

前頁

左の河原（賽の河原）において南を望みし
淀川（三途の川）を渡った亡霊達は、南へ南
へと冥途の旅を続ける。
谷寺の地に建つ閻魔大王の庁に至る
に規則される。
大知には代表的な二つの火祭りがある。一
つは北の東大寺二月堂の「おたいまつ」であ
り、いま一つは、南の長谷寺の「だだ押し」
である。
「だだ」というのは、閻魔大王の持ち物で
悪人を罰したり、けがれを直したりする杖で
あるとか、一又、悪魔を退散させ、無病息災
を得る印で、こゝを押してもらえば、辛せを
得る等、諸説がある。
長谷寺では二月十四日午後二時から、二本
尊の前で罪科を懺悔する法要が行なわれる。
・ 宰堂職が宝印を捧げ、全僧侶、堂内堂外の
参拝者の額に宝印を押す。終ると、赤青緑の

ありか 大坂の丁 5807-1/2 元2166P せがれ 卒元 1235P 5827-3/3 5867-1/2 5818P 5881P 5883P 5878P かに 担ぐ 元429P
 近松全書7巻 世活物 近松左衛門 元1422P 中巻 5829P

鬼達が松明を担いで堂内から回廊に出る。こ
 れを僧達が堂外へ追ひ出すのである。勇壯極
 まりなり。(「西国三十三所観音巡礼」西国
 札所会編、朱鷺書房、四十五頁参照)
 〆なお、長谷寺の地に「閻魔大王の庁舎」が
 あったことを示唆する逸話がある。(後述第九
 十六章へ西国三十三所観音巡礼の項におい
 て述べたい)

四十九日目の泰山王の庁は、三輪山にある

と信じられたいのであらう。
 こうして冥途の旅は、三輪山の麓の海柘榴市
 の術(武烈)即位前紀、推古紀十六年八月条
 まで来る。ついに終りとなる。

六道の衢に立つ鳥居をくぐる。来世である。

尚、六道輪廻の世界は、
 一、地獄(道) 四、修羅(道)
 二、餓鬼(道) 五、人間(道)
 三、畜生(道) 六、天(道)
 の六道からなっているとされる。(第九十六
 章へ六道輪廻の世界の項において既述)

追加

淡路町東区 東堀区 利州 5,867^P-8/2
(5,846)

41.11.9(日)

中陰 5812^P 5829^P 中(4) 経く 100^P
5846^Pに後1を

た姿に変貌を遂げたかと思ふと、
の間にやら、ぶらりと戻つて
とある。あれこのようにして、地蔵様は、現世
と来世の中間である。中陰の世界のはずれ
の六道の衢を中心として、地獄へ往つた
り、あるいは現世にあらわれたりして、衆生
救済のためにつくいておいでになるのである
う、と察せられる。

江戸中期に近松門左衛門が書いた人形浄瑠
璃の世話物(当代の出来事に取材したもの)
の一つに、**冥途の飛脚**がある。
大坂(大阪) 淡路町の飛脚屋亀屋の養子

市東区

大阪市東区淡路町二丁目(三船場)

コクヨ ケ-20 20x20

朝日新聞 H28.9.29付に淡路町と④有る

5/2

⑭ 梅川忠兵衛

宿屋

忠兵衛（大和国磯城郡新口村の百姓勝木孫右衛門の倅）が、新町の遊女梅川と馴染みとなり、遂に三百両の封印切りの大罪を犯して、新口村（大和国磯城郡多村の大字）新口村（大和国磯城郡多村の大字）もと新口村という。三輪山の西方七時で捕えられたことを脚色したものである。（「広辞苑」へ見途の飛脚）。「近松全集」第七巻、岩波書店、二七六頁。「帝国地名辞典」太田爲三郎、名著出版へ新口へ参照）

浄瑠璃曰、見途の飛脚に、こういう。奈良の旅籠屋三輪の茶屋で五日三日夜をあかし廿日あまりに四十両。つかひはたして二歩残るかねもかすむやはつせ山。

なお、浄瑠璃（歌舞伎）の「見途の飛脚」はたこやみり旅籠屋三輪の茶屋に、いりやゆる梅川と忠兵衛の恋の逃避行の地は、忠兵衛の生国大和であり、その宿がつまり三輪の茶屋であって

改行

日大神神社の一の鳥居脇の旅籠屋だといわれ
る。

この一の鳥居界隈を「馬場先」という。かつて
は三輪の門前町をなすて、俚謡に、

三輪の馬場先掃かいてもきれいな
宿の女の裾で掃く

と歌わされていた。

昔、京都あるいは大阪から長谷詣りにお伊
勢参りをする人らが、ここを往来して賑わつ
た。また、三輪の茶屋で必ず休んで、三輪

明神へお参りした、という。（「大神神社

中山和敬、学生社、一四頁参照）

それでは、一体何故、この茅瑠瑠に冥途
の飛脚という題名がついているのだろうか

か。

なるほど、三百両の封印切りの大罪を犯し
た忠兵衛が捕えられ、冥途の旅
路につくことになった。とを赤んているよ
うにも思われる。

しかしあるいは、江戸時代においても、また
な

(やどや)

49.8.24(日)
H6.6.26(日)⑤
17H29(2017)11.28~

5.869^P-1/5

次頁
から

三輪山の麓が、冥途の旅の終わる所だ。
というところからそれとなく言い伝えられていた
ので、近松門左衛門はこのような題をつけた
あかも知れない。
大男の一物は、九州の宇土半島に相当
する所、つまり金剛山から加太の方へ連なる
宇土半島ほど顕著で、なにか、
し古代の人々は、金剛山から加太へと伸びる
巨大な一物を想像したようである。(既述)

万③-423^P -
立つ虹⑤5869^P25/5

5,869^P-2/5

⑤5853^P

入相 元155^P日の入る頃
夕暮

前頁

■ 夕暮にいてゐ、夕暮に少々気になることが

ある。

● 地蔵和讃に、

「陽も入相のその頃は、地獄の鬼が現れ、

て、――（中略）――其の時能化の地蔵尊、

ゆるぎ出でさせ給ひつつ、云々」

と歌われてゐる。（第九十六章へ地蔵和讃の項

にありて既述）

△ 太陽が大きく傾いた夕方に、地蔵尊がや

るぎ出て、西院の河原へやってこられ

るというのである。

● もしかしたら、

△ 太陽が沈む前に見られる巨大な虹を、地

蔵尊（大男の弓なりになつた一物）に見立て

てゐるのかも知れない

と想像される。

① 万巻一四一三四一四には、

伊香保の八尺の堰塞に立つ虹の

頭（ま）までもさ寝（を）さ寝（て）は

いろはのろ

1875年
家紋 1101

5,869⁸ - ³/₅

HL

記本 278⁸ 149⁸ ⑦ 765⁸ - ¹/₂

記西 191⁸

⑦ 765⁸ - ¹/₂
⑦ 2351⁸ 「ろ」

「伊香保の（近之）八尺の堰塞（川の水
させき止めた場所、つまり土手）に立つ虹の
ように、はっきりに目につくほどに一緒に寝
ておいたら、どんなに楽しいことだろう」
尚「ろ」は、名詞につけて口調を整え、また
親愛の意を表わす接尾語であるという。（広辞苑）
なお、口伝神記に
「新羅国有一召。名謂阿具奴摩。此召之邊
一賤女晝寝。於足日耀如虹、指其陰上」
新羅の阿具召のほとり、ある女がうと
うとと昼寝していたところ、日虹の如く
やいて、其の陰上をさした。女はその時に姓
身み、赤い玉のような女兒を生んだ
という意味（第八章「天日槍伝説」の項において既述）
なのであろう
「虹と、蛇とは、同一視されており、蛇と
剣との因縁は極めて深い」
・「ホコは、男子性器の象徴である」
という。（「日本書紀」上）日本を典文学大系
若波書店、補注一四一八、補注一三八三参照

いりあい
入相 155^P 日の入り頃
夕暮

5,869^P-4/5

百科 23-242^P

せつし
説示 1248^P 教えやけるとき
説き示すこと

こういふことからみて、
虹は、陽物（靈力を示すもの）とみなさ
れていたのであろう。と推察される。
ちなみに述べると、
虹は、太陽とちやうど逆
の方向を中心としてあらわれ、太陽の真後の
一点の点から約四二度の半径をもつ円弧
状に見える。世界大百科事典に平凡社、
虹は、
②「太陽の高度が四二度以上の真昼に
は出ない」（「原色学習ワイド図鑑」へ天体
気象／学研、一一六頁）
という。
すなわち、
へ日の出の頃、および日が暮れる頃にあ
られる虹が、最も大きく見える。わけである。
恐らく、

けい
虫児 861

虹 ⑤ 162

5,869⁸-5/5

中口新語伝説集
48⁸~

「立つ」月や虹が立つ 元 1380¹

立つ虹 ⑤ 5869²-2/5

・ 難波あたりにやってきた者が、陽も入相（夕
暮）の頃、金剛山近傍から西院の河原（脩）の
方へ向かって立つ虹を見て、――大男の弓
なりになった陽物（地蔵尊）を想像したので
あろう。

と推察される。（「広辞苑」へ立つ参照）

尚、古代の中国では、虹を竜の一種と考え、雄を
虹、雌を虹児・虹女といった。（「広辞苑」へ虹・虹児・虹女参照）
色鮮やかな雄で、やや暗い色をしていて、雌は雄より暗いという
ことに参考にした。中国の文献を見てみよう

・ 蔡邕の月令章句に、

「虹は陰陽交接の気の形色に著るるものな
り」

・ 司馬氏易伝に、

「蜺は日旁の気なり。その占に言う、妻夫
に東すれば、すなわち水を見る。陰の陽に
勝つ表なり」

とある。また、宋務光は、

「虹霓紛錯、陰陽の珍るるなり」
と言ったといひ、

・ 春秋元命苞に、

H9.8.24(日)
H6.6.27(月) 日
↑

金王 604[↑] 金丸 731[↑]
金王 604[↑] 金丸 731[↑]

5,871[↑]

ひあ 1848[↑]
ひあ 1847[↑] 〇223a



日本古典文学大系、岩波書店、一八四頁、注四参照)
とある。

• いかにもへおかしげな歌✓ではあるか、
ではこの歌は、どう解釈すべきなの~~だ~~うう
か。

• 文字通りに読むと、
△私の夫が禪の中に収める円い石状の吉野
の山に、氷魚(小鮎)が垂水下かつている
という意味になろう。

• とはいえ、曰吉野の山と曰氷魚(小鮎)長さ
約二(三)の鮎とは、その大きさがあま
りにも極端に違(い)すぎるので、何(なん)のことなの
か、何故(なぜ)おかしいのか、分(わ)かりづら(い)い。

• また、どうして禪の中に曰吉野の山を収
めることが出来得ようか。

• いかし、この当時の人々が、
へ近畿地方の大男の金丸を曰吉野山(金
丸山)になぞらえ、
股間にある金丸(金王)のこ(こ)を曰吉野山
(金丸山)とも呼んでいた。

と解すと、先の「わが背子か」の歌は、
私の夫が禪の中に収めようとしている吉

H9.8.24(日)
H6.6.28(月)田
→

三省堂1089
Stone (P.L.通例)

金精神
金精神

H2.4.17(火)田
5872-1/2

金峯山 607
金峯山

包基 2013
包基

ひょうきん 二つ
滑稽

ネ 1895
ネ

茅纏之稍 113
茅牙 紀上76

野の山(つまり金玉)は丸い石のような形を
て立派なのになんとまあ、葦牙状の
茅纏之稍(ちんぽ)がまるで氷魚(小鮎)のよ
うにかゆいらく、ちよこんと下加っている
ことよ
と、剽軽に、少々誇張して歌ったもののよう
に思われる。
鮎(あゆ)の尾のように見えただけであらう。
ともあれ、万葉集が作られる以前から
鮎(あゆ)の尾のように見えただけであらう。
へ吉野山(金峯山)は、大男の毬丸に見立
てられていたのであらう。
と推察される。
また、
吉野の金精明神社は、延喜式の金峰神社
のことであり、祭神は金山彦命ならん
という。へ「帝国地名辞典」太田為三郎、名
著出版、へ吉野山(参照)
そして因みに述べると、天智紀十年(六七

かんかん 外観 5870 1/2
 輪郭 5870 1/2
 5876 1/2
 内「る」とは 三峰堂 1089 筆A
 大か「てある」 stone (R 面別) 5,872^P-2/2

H 11. 11. 23 ⑤

包下 380⁹
 42770KH/2.1.9⑤

十二月十一日条に、「時に、童謡して曰はく」として、
 み吉野の吉野の鮎 鮎こそは 鳥傍も
 良き え苦しき 水葱の下 井の下 吾
 は苦しき
 とあり、「吉野の鮎」と歌われている。
 あるいは、この童謡を踏まえて、
 むか背子が犢鼻にする圓石の
 吉野の山に氷魚(小鮎)ぞさ加れる
 という歌が作られたのかも知れない。
 ●なお、偶然の一致とはいえ、筆丸のことを
 英語でもロストーン(ズ)という。日円い
 石山という意味であろう。
 ●また、よほど毛深い大男とみえて、こ
 の一帯の地形は判然としない。
 日金峯山(吉野山)の南あたりから、丹
 生川上神社下社を経て、日銀峯山(南麓をく
 るりと流れ下る)日丹生川(大男の陰囊
 (ふくら)の外觀形状をそれとなく示しているよ
 うにも思われるが、
 なるにしろ、
 朦朧としていて確かでは

2/2

28

あんま、
行在所 81
地名 58
日本史 言授教科書 186
5,873
5933
1961

南北朝時代 1883

日本 393
5870 中 社 奈良の地図 下社

予め参考迄に述べると、後代の南北朝時代
銀峯山の西方約五時、丹生川西
岸の「賀名生」という所に、南朝側の都が置
かれる。
賀名生は、旧名を「穴生」といった。
初め延元元年（一三三六）後醍醐天皇が先ず
此地に至り、吉野へお移りになった。正平三
年（一三四八）に北朝側が吉野を襲って、こ
を焼いたため、後村上天皇は又此へお移りに
なり、その時「賀名生」と改められた。その
後南朝の都は、河内・天野行在所（仮のすま
い）を点々としたが、文中二年（一三七三）から
二十年間、「賀名生」を皇居とされたという
（「帝国地名辞典」太田為三郎、名著出版
（賀名生）参照）



H9.8.24(日)
H6.6.29(中)⑤
→

⑤ 3048^P-3/3

5,874^P

⑤ 3048^P-1/3

かかと
踵 372
お尻 278
大足 278

⑤ 3042^P 九州の巨人
3048^P

● それでは、近畿地方の大男の足はどうなっ
てゐるのだろうか。
● すでに述べたように、九州地方の大男の場合
は、両足が分かれており、両膝があり、両踵や
両爪先までも揃つていて、まるで、胸
を張り、大手を振つて、西の方へ歩いてゐる
かのように見える。(第14回九州の巨人の図参照)
● ところか、近畿地方の大男には、それうし
い足が見当らない。――なるほど、胡座を
かき、両足を組んでゐる姿であるようにも見
えはする。――とはない
● かし、この当時の人々は、どうしてもし
九州地方の大男と対比せずにはおれなかつた
のであろう。
● そして、
へ近畿地方の大男には足が無い
という噂が世間に広まり、やがてすっかり
定着してしまつたようである。

*

せいつ 小林
津地 580'
弥立 2284'

「更い掛」
次頁 2行

5,875'

天々
改行

天つぎ

かむ 1476'

「士て」 ⑤ 5860'
⑥ 5920'

夕HV

鳥瞰（高所から見おろすこと）
よく知られてゐるようには、天神天皇
陵や仁徳天皇陵などの古墳は、天高く舞い昇
つて見なければ、その全容を把握できないほど
途方もなく巨大である。
母の姿なのか、それとも他の何等かの形な
のかはともかくとして、ともあれ、
へ日本の古代の人々は、天空から見た時の
形状を思い描きながら、これらの古墳を作った
といえよう。

すなは、
即ち、古代の人達は、天上界から地上を
見た時の形を大地に居ながらにして想像す
ることが出来たのであろうと思われろ。
そして、幾世代にもわたるこうした訓練の
積み重ねがあったからこそ、空高く
から見なければ分からないような大男の姿を
九州や近畿の地勢の上に思いめぐらし、出来
得たのであろうと推察される。

地形の上に、
当時の人々は、近畿地方の
何とも奇怪な、身の毛のぞ立つばかりの

$$5.876^{P-1/2}$$

そのと云1309^p
身のものよたうさま

大男の姿

の姿を想像したものである。

■ 頭はでこぼこ多く、うしろにありげで、
手は前へ垂れてゐるやうどこにあるのやら
はつきりせず、
身体からだの輪郭りんかくさえもおぼろげであ
つて、――さらに足は一つしかなく、しかも
その足は萎え、先細りとなつてゐるのであ
る。

■ 仰向きに頭部を北の方にして寝てゐるこの
大男は、ときに白雲を額に、頭をもたげら
る。

「またまた丹波太郎が目を覚ましたぞ」

「くわばら、くわばら」

■ 丹波の山の上にもくもくと立ち昇つてゆく
入道雲を目にした都の人々は、首をすくめて
怖れおののき、震えあがつたに違ひない。

■ なお、

(1) 南風なんふう（なま強い風）が吹くような時に、京
都の北、丹波の山々の向うに日入道雲にゅうだうぐも（積
乱雲）が現われる。

(2) また、上昇して冷やされた日入道雲の頂

→ 次頁から

中央公論社、一九二八頁参照)

という。

(「日本の幽霊」池田弥三郎、

的に多い

日本の幽霊は、夏に出現することが圧倒

的であるからあえて述べる

というわけなのであろう。

る

雷がおどろおどろしく「ドロドロドロ」と鳴

へなま暑い風が「ヒュー」と吹き「ー」と

太郎がその頭をもたげるとき

つまり、京都の北の丹波の山の上に、丹波

頁、左下の図参照)

気象、学習研究社、一〇六と七頁。同一二六

という。「原色学習ワイド図鑑」八天体・

雨を降らせ、雷をとまなうことが多い

(3) そして、入道雲(積乱雲)は、激しい

殊に美しく輝く。

から照りつける真夏の太陽の光を反射して、

上部は、氷の粒となつて、南の方角

天又月乎 月のかかやま虹のどと、この陰上を~~か~~か(ま) 121
 夕暮、大空を映こまて、金銅山から幸部盆地にまはかるおりに
 5丁目に見えたか? 正丁

天 536°

1049 小林 10512
大カン 12420

習慣小林 404³

5.877

陽も入りぬ
20頃18
第5853
元上 466 出2
" 634
出2 = 出2 剣

H30.12.1 ~ (3回)
R1(2019)5/1 ~ 5/2
令和2(2020)7/20(月)
~ 7/21(4回) 米

$$\frac{7}{2} \text{ F } \frac{7}{2}$$

ゆせて考えるようになり、その結果、
 一へ死者の顔を、白布で覆いかくす。見えないようにする。
 ということが、社会の慣習となったのだろうか。
 隠すことという字があるところを見ると、
 中国から伝わった習俗なのかも知れない。
 なお、枕を北にして死んだ人を寝かせる慣
 例となっていて、この日本枕の風習は、
 新羅が涅槃のとき西面北枕だったのにならう。
 という。へ「広辞苑」へ「北枕」参照。
 また、ついでに述べると、
 へ幽霊の下半身をぼかす。まるで足が無
 いかのよう描いた最初の人は江戸時代の画家・
 円山元挙（丹波の人）である。元山元挙
 といい、一「仏教の知識百科」主婦と生活社
 一六二頁参照。
 江戸時代以前、幽霊に足が無いという噂
 が広まっていたのであろう。

コクヨ ケー-20 20×20

Q

529

Not 348^r $\in K$

219

35

H9.8.24日
H6.6.30日

5.878^P

極楽 5780^P
仏教の経典 54

天道 5831^P
5809^P - 1/2

ふたつ 1946^P
天道 5831^P

招待してく水るからである。すなわち、裁判などといった面創な手続き
なせなら、仏か、特別のはかりで極楽へ
と。いう。
にかけら水ることもない。
冥途の暗い旅路をさまよい歩いて七度の裁判
断末魔の苦しみに襲わ水ることものなけ水は、
極楽へ生ま水変わる人間は、臨終のとき
仏果を得るとい水ている。
浄土とさ水る。念仏行者は、死後ここに生まれ
安楽な世界で、阿弥陀仏が常に説法して
た所にあて、諸事具足し、全く苦患のな
2) 極楽浄土は、西方十萬億仏国土をすぎ
廻の世界の六道のうちの一つとされ
日天界は、先に述べたようた六道輪
日天界は、極楽とは異同さ水かちだが
しかし、実は、全然別のものである。
天界は、極楽とは異同さ水かちだが

せぼ 狭まる 1253 補陀落 19x6' Potalaka ふたらく (ふたらくせん)
 3x6 497 5888 5879P

ふたらく

をいっさい踏むことなく、極楽へ往生できる
 のである。(「広辞苑」へ「極楽」。「仏教の知
 識百科」主婦と生活社、五四頁参照)
 ・なるほど、人々が極楽浄土へ行きたがった
 のも、無理からぬことであつた。
 ・六道輪廻の世界に住む者達は、西方十万億
 仏国土を経た所にあるという極楽の方へ向か
 へ、ただただ一心に手を合わせ、阿弥陀様の慈
 悲にすがるのであつた。

図では次に「補陀落」(普陀落とも書く)
 光明山・海鳥山・小花樹山と説すに
 見ておみこくとくよう。
 ・「補陀落」(補陀落山)は、インドの南海
 岸にある山(Potalaka)のことであつて、観世音
 菩薩の居住地とされる。
 ・インドの地形は、北が広く、南へ行くにつ
 れて狭まっております。紀伊半島も
 同様に、北が広く、南へ行くにつれて狭ま
 ります。

⑤5888^P 神陀落渡島

⑤5736^P

5,880^P

⑤5888^P

ふたすく 72 1946^P
かかせ 5人 497^P

909M

・こういたこから、日本では、
△神陀落△神陀落山に相当する山は、紀
伊半島南端の△那智山である。
と考えられ、~~そのようになら~~たのであろう。「
辞苑」△神陀落△神陀落山へ観世音。
事典△平八社へ観世音菩薩（参照）
・つまり、近畿の大男の足先端部に当ると
ころ△那智山に、観世音菩薩の住居がある
とみなされたように推察される。
・なお、すで述べてきたことながら、
△観音の神陀落の浄土は、紀州（和歌山
県）の熊野の南の海中に想像された。
という。（第九十六章△世は末法）の項にお
いて既述）

*

日本書紀 卷194P
扶桑略記 紀下174
39P 沈水

沈水 沈水 沈水
沈水 沈水 沈水

百科6-597P
5,881P

天道 空居天
須弥山 2139
5831

仏教の文・語
5867P
「ゆう」7ない。

5867P
「ゆう」7ない。

速に広かったことを物語っている。

・現存する仏像中、最も多いのは観音像であ

り、その信仰が「法華経」の伝来とともに急

に広がったことを物語っている。

・扶桑略記に推古三年条に、淡路島に漂着

した沈水香木で観音像を彫造させたところ

が初見で、法隆寺の百済観音、同寺夢殿の救

世観音をはじめとする多くの観音像が作られ

た。

・観世音菩薩は、現世の悩める衆生の声(音)

に耳を傾け、世に光を与えて下さる慈悲深い

菩薩である。

・地蔵菩薩は、死んだ後に救って下さる仏である。

・観世音菩薩は、死んだ後に救って下さる仏である。

・来仏である。

・六億七千万年後この世に下降するとされる未

から二番目「兜率天」にあって、釈尊死後五

から二番目「兜率天」にあって、釈尊死後五

・弥勒菩薩は、現在、須弥山上の空居天の下

・観世音菩薩(観音菩薩)である。

・弥勒菩薩・地蔵菩薩・

・立って有名な菩薩が、弥勒菩薩・地蔵菩薩・

・在といえる。そして多くの菩薩の中でもきわ

・派遣された仏の代理人であり、仏に準じた存

・菩薩とは、衆生を救うために極楽世界から

・西国三十三所観音巡礼

5882P
(天)

● 仏の慈悲を表わしているといわれる母親の
ように優しい観音様のお姿が、人々の心を
とらえたからであうか。
● もっとも、如意輪観音、聖観音、十一面観
音などのように、經典のなかに描かれた観音
さまもあつた、子安観音、馬頭観音などのよ
うに、人びとの生活のなかから生み出された
観音さまもあつて、
● 呼ぶ名は多種多様である。
● なぜそうなったかといえ、法華経の
「観世音菩薩普門品」に、
「観世音菩薩は、三十三身に化身して、観
音を念ずるあらゆる所で衆生を救いたまう」と
あるくだりに由来する。
● そして、現世における観音の救いを期待し
て、奈良・平安時代頃から各地に三十三か
所観音霊場が設けられ、その霊場めぐりが
盛人になった。(「仏教の知識百科」主婦と
生活社、二三頁、二四八頁参照)
● なかでも西国三十三か所観音霊場かも
とも古く、奈良時代に溯るといい、

1872年
上人 7/1104^P

5829^P 5826^P 3/4 3ヶへ

5.883^P - 1/2

改行

西国観音の巡礼を最初にはじめたのは(聖武)
天皇の御世に長谷寺の東岡に堂宇を建立した
徳道上人である、といわれている。

*

長谷寺は、三輪山の東麓にあつて、
先に述べた日海石榴市の八十の僧侶
寺院である。

徳道上人は、一策をめぐらせた。一室にこ
もり、いっさい面会謝絶。―――ほど経て、

側近の人たちに、
「上人は、今朝頓死しました」
と発表させた。

ところか、それから七日月のことであつた
という。

5,883^P-2/2

⑤5867^P

西口・新西口...めぐり36

ほうさつ

忙殺伝2014^P

次頁
から

と仮定してみたい。(既述)
なるほど、どう見ても人間の目には長谷寺

一個の口宝印口(閻魔大王の持物である)
宝印口(口宝印口)を手にした徳道上人が、葬儀
の準備に忙殺されている人たちの前に姿を現
わし、
「冥土へ行きなさい。閻魔さまに会ってき
た」
というのだった。(「西国・新西国礼所めぐ
り」首藤一。創元社、三八〇三九頁参照)
こゝに
へ口長谷寺口と口閻魔の口口とがく同一視

49.8.25月
46.7.2(土) ⑤
F 改行

元 1594P
得心 御得するこ 35日目(閏)魔大王
35日(5817)1/2

5.884P

元 164P
陰陰 陰気なさま
改行

前頁
の堂宇しか見えな
ろ初瀬の地に、実はいかめしい閻魔大王の
片舎が陰陰として影のようにならび建っている
と信じていたのかも知れない。
●長谷寺と閻魔大王の庁とは、陽と陰あるは
現実と幻影といった関係をとりえられて
いたのではあるまいか。
●そこで、
へ徳道上人は、長谷寺の一室にこもり、人
知れず陰の世界の閻魔の庁へ行き、閻魔大王
に会って空印の「ダダ」をもらい受け、
そして、死んで七日目に姿を現わした。
という話が、真実のミとして人々に受け入
れられたのであらうと想到される。
●いかにも、死んだ者の徳道上人が、本来の道
筋をとり、死出の山を越え、三途の川を渡つ
て閻魔大王に会い、その後同じ道を戻ってき
きたのであれば、少くとも三十五日の倍の七
十日を要すると思われるのに、
令の一のゆずが七日で回復し、生き返ったというのであ
る。信心深い人達を得心させよのに充分なこ
とだったのであらう。

5878P
4行
実は

い

感歎 500P

まかお 真顔 2066
あせん 元 500P
おん 元 500P

5,885P

● 徳道上人は、驚きあきれて目を丸くし、言
葉もない人々に、真顔で、
「私は、正規の冥途の旅をしないで、長谷
寺から極秘の抜け道を通り、陰の世界へ入
って閻魔大王にお会いした後、再び同じ
道を引き返して、この陽の世界へ帰ってきた
のですよ」
と説明し、閻魔大王の地蔵菩薩の恐ろしい
様子の一部始終を語った。
● さらに徳道上人は、一層真剣な顔をして、
こう言った。
「閻魔大王はこうおっしゃった。確かに
つまりと、こう申された。
日本には三十三カ所の観音霊場がある。
この水を巡礼した者は、たとえ悪人であつても
天界へ迎える。何かの間違いで地獄へ落ちる
ものがあつても、責任を持って天界へ移す。
その証拠に水を渡しておく」
そう明言して閻魔大王がこの宝印「ダダ」をく
れたのです」
● こうして居合せた人たち、あるいは伝え聞

いた人たちが数十人を引き連れ、徳道上人は
先達となり初めて日辺日本国（近畿地方）三
十三カ所を巡拝した。
• これが、三十三所観音巡礼の始まりという。
• この時の巡路は、現在とは少し違ってあり
一番はいうまでもなく奈良県桜井市初瀬の長
谷寺だった。
つまりち（閻魔大王の庁舎がある）信ら
水たと思われ所、長谷寺から、巡礼の
旅は始まったのだった。
• 現在一番の那智山は六番目、現在最後の谷
汲山は十八番目、現在十番の三室戸寺が奈良
朝当時最後の三十三番目であつたという。
• どのくらいの日数を要したのかは、きり
りないが、一カ年近くかけ、旅の苦勞を重ね
て、三十三所観音を巡礼したのであろう。
• 徳道上人のあとしばらくの間は、巡礼する
人が続いたようであるが、——しかし、何
といつても、大変な旅である。
• いつとはな—に、巡礼者の姿はまばらにな

再興

⑤ 5891 P 14行~

再興

988 次版2行
- 270
718年

5.887 P

えんまの序
あ 5882 10行

花山天皇
天 402 P

986 19才
968 18
18

花山天皇

つていった。
と二つかその後、花山法皇により徳道上人
の遺志は受け継がれ、巡礼が復興される。
なる。
尚、花山天皇（九六八—一〇〇八）は、九
八六年剃髪、時に年一九であつたという。
長谷寺（閻魔の序）、播磨国の書写山（姫路
市西北方六時、大男の腕に相当）などを訪水
て修行された。
そんなある時、仏眼上人や性空上人から、
「いまから二百七十年ほど昔、徳道上人に
よつてはじめられた三十三所の観音巡礼は、
いまではそのあとを踏む者が次第に少なくな
り、まさに忘れられようとしてあります。
これの再興することは極めて意義深いの
ですが、それをできる人は、法皇のあいで他
にはありません。」
とすめられ、花山法皇は巡礼再興を決意

H9.8.25(月)

ついに

モふたらし (ふたらしく山) ⑤5880
⑤5879 5,888^P-1/2

改訂

モ「補陀落」 (ふたらしくせん という)

ふたらし 札所 1945⁺

改訂

988.24

968.1

20 20

⑤5889
-1/2
-1/2

写真四版

831

832

改訂

ハ、三九頁参照)

参考迄に述べると、

・那智山は観世音菩薩の居処と考えられ、

平安末期ころ、熊野信仰に伴ない、那智

山を中心として、補陀落山信仰が起った。

ついに、補陀落渡海と称し、小舟に乗

り込み、南海の沖へ漕ぎ出して、

観音の浄土に往生しよう。

とする熱烈な信者をさえ出した。

という。『世界大百科事典』平凡社、八観

された。

●永延二年(九八八)三月十七日、花山法皇

は、笈に納めた十一面観音像を背負って巡礼

の旅に出られた。●野に伏し山に寝て、那智山

にたどり着かれた花山法皇は、ここを一番の

札所とお定めになり、

補陀落や岸打つ波は三熊野の

那智のお山にひびく滝つせ

の一首を奉納されたという。『西国・新西

国札所めぐり』首藤一、創元社、一二頁、三

(当時二十歳)

・カラー
 左側の右端(おくら
 左端)に、上、下段
 またがて大きく
 掲載下さい。

5,888^円 - 2/2



カラー
 ↑

542

1364
 1464
 思真図版 831
 那智の滝 (高さ133 m)
 那智山青岸渡寺 那智山静渡寺 平成3年8月1日発行 35頁参照

5,889^P-1/2

・わろー

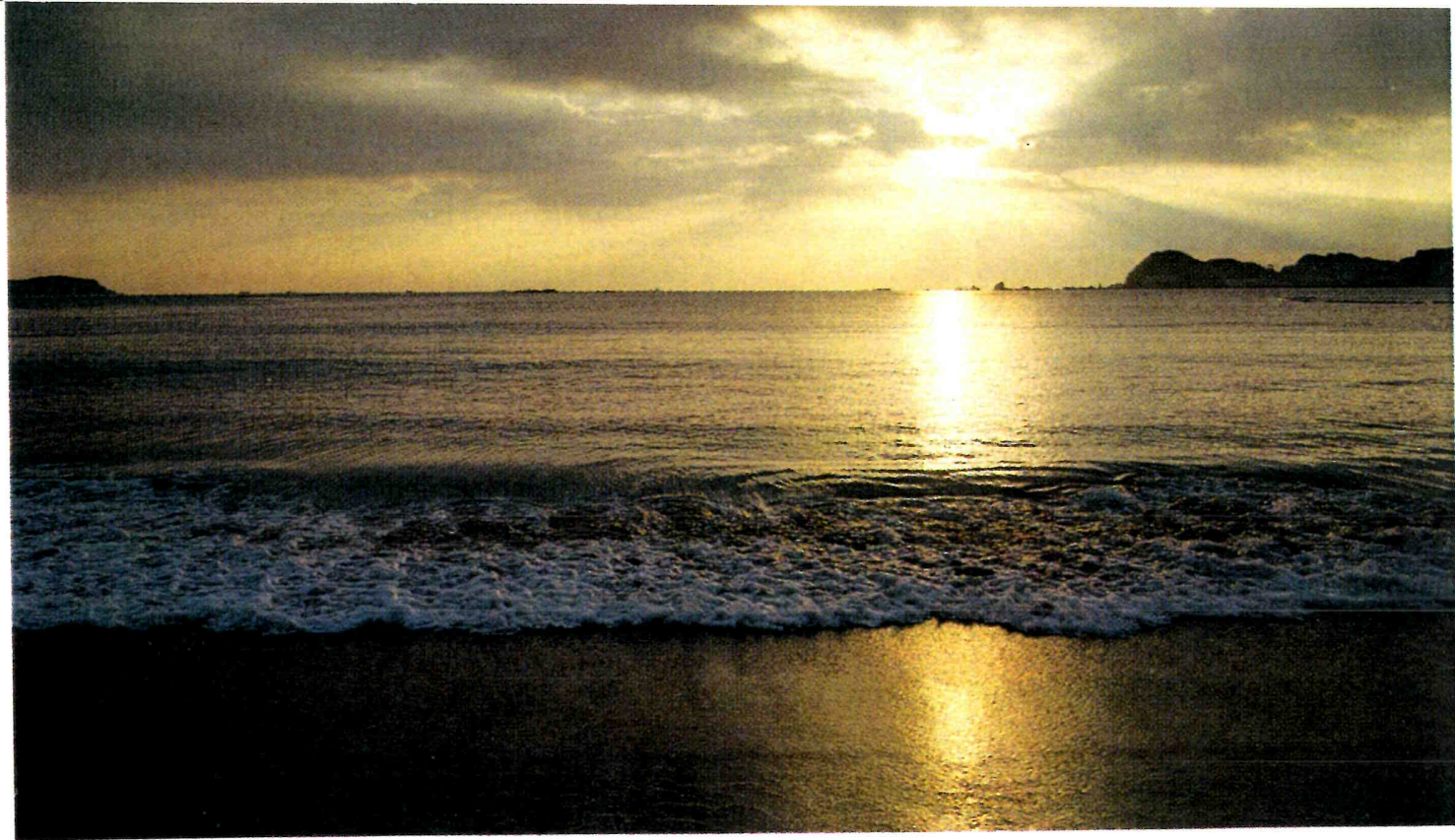
・左頁の上半分に

限度一杯はみ出し

大きく載せたい。

・水平線が傾いて
いる。

・水平なにおいて
下さい。



中心は川わけ

ゴ4
13QG

中心は川わけ 14QGゴ4

補陀落渡海 那智の浜

写真図版 832 補陀落渡海 那智の浜

「那智山青岸渡寺」

那智山青岸渡寺 平成3年8月1日発行 44頁参照

5,889^D - 2/2

西国三十三ヶ所
⑤5882^P
5888^P - 1/2

世音菩薩 ✓ 参照

・なお、

へ

那智山

が

観

世音菩薩

の

住居

と

考えら

いた

ので、

花山

法皇

は、

那智山

に

り

着き、

ここを

西国三十三

ヶ所

観音

霊場

ら

の

一番

の

札所

と

お

定

め

と拝察される。

*

⑤5879^D
居⑤5880^P
住居
地

⑤5888^P
1/2 13所

すまい
居

改行 5.890P

巡礼の旅

昔の巡礼者たちは、
き衣類がすれて傷まないうすい衣を着、手甲脚絆をつけ、菅笠をかぶり、金剛杖を持っていった。
なお、笈は仏像・衣類・食器などを入る為の足のついた箱のことである。
また、笈摺（袖の無い陣羽織といった形の衣）の背中部分は、三枚の布を縫い合せて作られる。男性用は三枚とも白であり、前から見ても白である。しかし、両親のある女性用は中央が白で左右は赤、従って前から見ると左右に赤が見える。片親のある女性用は中央が赤で左右は白、従って前から見ると男性と同じ。両親の無い女性用は前後とも男性用と同じである。（西国・新西国札所めぐり、首藤一、創作社、九頁。「広辞苑」へ笈摺参照）
一方、死装束は白木綿の広袖の着物で、二枚に手甲脚絆、頭巾、白足袋、草履、数珠、杖、六文銭を入れた頭陀袋をやる。（「仏

H29(2017)12.1(金)~12.6(月)
H30(2018)12.2(日)~(2回)復活
R1(2019)5.18(日)~5.2(3日)
令和元(2019)11.26(木)~11.29(日)

再興
⑤ 5887 17行

5,891⁷

5886⁷ 5897⁷
11行へ ↓

11/28
11/26

*

教の知識百科し主婦と生活社、二六一頁参
 照) 両者はかなりよく似た服装であるように思
 われる。
 装束に身を包み、
 とさめる那智山をはじめとして、近畿の大男
 の身体中を巡り歩き、点在する三十三所の観
 音様を参拝する。死出の山を終て、現世へと
 戻ってくる長い長い気の遠くなるような旅を
 したのかも知れない。
 花山法皇は、
 「こゝれを再興することとは、極めて意義が深
 い。云々」
 というすすめに従い、
 現代風にいえば、この旅は、
 へ死者になつたつもりでの体験旅行
 といつたところであらうか。